

水盤の王さま

小川未明

青空文庫

去^{きよ}年^{ねん}の寒^{さむ}い冬^{ふゆ}のころから、今^{ことし}年の春^{はる}にかけて、たつた一^{ひと}ぴき
 し^{きんぎよ}か金^い魚^{のこ}が生^いき残^{のこ}つてい^ません^でした。そ^{きんぎよ}の金^い魚^{のこ}は友^{とも}だちも
 な^{おや}く、親^{おや}や、兄^{きやうだい}弟^{だい}とい^うものも^なく、ま^{ひと}つた^くの独^{ひと}り^ぼつち
 で、さ^{すいばん}び^{なか}し^{およ}そ^おう^よに水^{すい}盤^{ばん}の中^{なか}を泳^おぎ^まわ^つつて^いま^した。

「兄^{にい}さん、この金^{きんぎよ}魚^よは、ほん^{つよ}とう^{きんぎよ}に強^{つよ}い金^{きんぎよ}魚^よです^こと。たつ
 た^{いも}一^もつ^うにな^とつても、元^{げん}氣^きよ^くく遊^{あそ}んで^いま^すの^ね。」と、妹^{いも}が^{いと}い
 ま^した。

「あ^{きんぎよ}あ、金^{きんぎよ}魚^よ屋^やが^きた^ら、五^ご、六^{ろく}び^き買^かつ^て、入^いれ^てや^らう^ね
 。」と、兄^{あに}は^{こた}答^{こた}え^まし^た。

ある日^ひの^こと、あ^{よこ}ち^らの横^{よこ}道^{みち}を、金^{きんぎよ}魚^{よう}売^うり^の通^{とお}る^よ呼^よび^こ声^{こえ}が

聞きこえました。

「兄さん、金魚売りですよ。」と、妹は耳を立てながらい

ました。

「金魚やい——金魚やい——。」

「早くいつて、呼んでおいでよ。」と、兄はいいました。

妹は、急いで馳けてゆきました。やがて金魚屋がおけをかつ

いでやってきました。そのとき、お母さんも、いちばん末の弟も、

戸口まで出て金魚を見ました。そして、小さな金魚を五ひき

か買いました。

水盤の中に、五ひきの金魚を入れてやりますと、去年か

らいた金魚は、にわかになつたのでたいへんに喜んで

だように見みえました。しかし、自分じぶんがその中なかでいちばん大おおきなものですから、王おうさまのごとく先せん頭とうに立たって水みずの中なかを泳およいでいました。後あとから、その子こ供どものように、小ちいさな五ごひきの金きん魚ぎよが泳およいでいたのです。これがため水すい盤ばんの中なかまでが明あかるくなつたのであります。

「兄にいさん、ほんとうに楽たのしそうなのね。」と、妹いもうとは、水すい盤ばんの中なかをのぞいていいました。

「今こん度ど、金きん魚ぎよ屋やがきたら、もつと大おおきいのを買かって入いれよう。」と、兄あにはちようど、金きん魚ぎよの背せ中なかが日ひの光ひかりに輝かがいでいるのを見みながらいいました。

「けんかをしないでしょうか？」と、妹いもうとは、そのことを気き遣づかつた

のであります。しかし、兄あには、もつと美しい金魚きんぎよを買かつて入いれるということより、ほかのことは考かんがえていませんでした。

「金魚きんぎよやい——金魚きんぎよやい——。」

二度どめに、金魚屋きんぎよやがやつてきたときに、兄あには、お母かあさんから

三さんびきの大きい金魚きんぎよを買かつてもらいました。それらは、いまま

でいた大きい金魚きんぎよよりも、みんな大きおおかったです。かえつて、

水盤すいばんの中なかはそうぞうしくなりました。けれど、去きよ年ねんからいた

一いちびきの金魚きんぎよは、この家うちは、やはり自分じぶんの家うちだというふう

悠ゆう々ゆうとして水みずの面おもてを泳およいでいました。五ごひきの小ちいさな金魚きんぎよは、

おそれたのであるか、すみの方ほうに寄よつてじつとしていました。三

びきの新あたしく仲間なかま入いりをした金魚きんぎよのうち二にひきは、ちよいとよ

うすが変わかつたので驚おどろいたというふうで、ぼんやりとしてしました
 たが、その中うち一いちぴきは生うまれつきの乱暴者らんぼうものとみえて、遠慮えんりよも
 なく水みずの中なかを走はしりまわっていました。

三さんびきの金魚きんぎよの入はいつてきたのをあまり気きにも止とめないようす
 で、前まえからいた一いちぴきの金魚きんぎよは、長ながい間あいだすみ慣なれた水盤すいばんの中なか
 を、さも自じ分ぶんの家うちでも歩あるくように泳およいでいますと、ふいに不遠ぶえんり
 慮よな一いちぴきが横よこ合あいから、その金魚きんぎよをつつきました。

「あんまり威張いばるものでない。だれの家うちと、きまつたわけではな
 いだろう。そんなにすまさなくてもいいはずだ。」と、ののしる
 ごとく思おもわれました。

前まえからいた金魚きんぎよは、相あ手いてにならないで、やはりすましたふう

で泳いでいますと、乱暴者は、ますます意地悪くその後を追いかけたのです。こんな有り様でありましたから、いつしか五ひきの小さな金魚は夜のうちに、みんな乱暴者のために殺されてしまいました。一月ばかり後まで、生き残っていたのは、前からいる金魚と乱暴者と、もう一匹きの金魚と、わずかに三匹きでありました。

「兄さん、金魚は弱いものね。今度死んでしまつたら、もう飼うことはよしましうね。」と、妹はいいました。

「ああ、金魚よりこいのほうが強いかもしれないよ。」と、兄は答えました。

「兄さん、こいを買つておくれ、毎晩、夜店に売っているから

。「と、末の弟が良かったです。」

その日のことでもあります。暮れ方、妹は、末の弟をつれて夜店を見にいつて、帰りに三寸ばかりの強そうな赤と黒と斑のこいを二ひき買ってきました。そして、それを水盤の中に放ったのです。

月の照らす下で、水面にさざなみをたてて、こいの跳る音を聞きました。それから四、五日もたつと、三びきの金魚は、みんなこいのために、つつかれて殺されてしまいました。後には、二ひきのこいだけが元氣よく泳ぎまわっていました。

「とうとう、こいが天下を取ってしまった。」と、兄はいいました。

「ほんとうに憎いこいですこと。」と、妹はいいました。

一日、兄は留守でした。妹は憎らしいこいだからといって、毎

日にちか

日換えてやる水を怠りました。たつた、一日でしたけれど、あ

ひ

ついでであったもので、水が煮えて、さすがに威張っていたこい

も死んでしまいました。そのときからすでに幾日もたちました。

いまだに水盤の中はだれの天下でもなく、まったく空になつて

います。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「時事新報」

1921（大正10）年7月31日

※表題は底本では、「水盤《すいばん》の王《おう》さま」となっています。

※初出時の表題は「水盤の王様」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年2月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水盤の王さま

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>